

英語科教育における新教材の内在化について

西本 有逸

(京都教育大学英文学科)

On the interiorization of new materials in English language education

Yuichi NISHIMOTO

2009年11月30日受理

抄録：本論文は英語科教育における新教材の内在化について、実践的かつ理論的にアプローチするものである。まず、実践的アプローチとして、筆者が教職科目である中等英語科教育の授業でこれまでに開発してきたワークシートを提示する。このワークシートは主免実習（英語）に参加した学生の声とともに改良を重ねてきたものである。続いて、本ワークシートを使用した活動例として、母語による理解、ペア・ワーク、制限時間付きの読み、アナウンサー・リーディング、リード・アンド・ルックアップを紹介する。どの活動も内在化を促進するものと考えられる。次に、理論的アプローチとして、そもそも内在化とは何かという問いに対してヴィゴツキー学派とトマセロの知見でもって応答する。内在化とは、人間が人間社会の文化・歴史的発展の所産を自己の中に取り込むことにより、意識が自然的・動物的な低次の段階から文化・歴史的な高次の段階へと創り変えられるということ、また当該活動過程は主体（人間）と客体（外的対象世界）との間に中間的な環が存在するという媒介的過程、人と人とのコミュニケーション（交通）の過程という2つの特徴を合わせ持つということを確認する。最後に、英語科教育における内在化について考える視点として、筆者がこれまでに考察してきた模倣、記号操作、内部への成長という3つの視点に加えて、身体性と情動の問題が不可分の関係として関与することを示唆する。

キーワード：内在化，新教材，英語科教育

I. はじめに

本稿では英語科教育における新教材の内在化について考察を進める。考察の対象は中学校英語教科書の教材とその内在化とする。小学校英語活動が実質的に始まっているにせよ、内在化が進むのは外国語としての英語の意識的な学習が始まる中学校段階だからである。本稿は、1) 内在化を促進するワークシートの開発、2) 当該ワークシートを使用した活動の工夫、3) 内在化の理論的考察、4) 英語科教育における内在化について考える視点という順序で展開される。

II. 内在化を促進するワークシートの開発

筆者は、2001年4月1日に本学に着任して以来、教職科目では中等英語科教育Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを担当している。附属桃山中学校・京都中学校・高校にて、いわゆる主免実習（英語）に参加する学生達は中等英語科教育Ⅰ・Ⅱを履修して実習に臨むわけであるが、これらの授業の中で筆者は新教材の内在化を促進するようなワークシートを学生に作成させ、それを使用した模擬授業を課している。これまでの学生自身による試行錯誤と実習校での生徒達の反応とを鑑み、また筆者自身も改良を重ね合わせ、現在では以下に示すような型に落ち着いている。

Lesson 9 LANDMINES AND CHILDREN		第9課 地雷と子どもたち
Part 1		パート1
What is this?		これは何ですか。
It is a danger sign.		() を示す標識です。
Signs like this are seen in the forests and fields of Cambodia.		() 標識は () ます カンボジアの () の中で。
What is the danger?		何が () なのですか。
Landmines.		() です。
These Cambodian children like to play in forests and fields, just like you and me.		このようなカンボジアの子ども達は () が好きです () の中で ちょうどあなた達や私の () 。
But some of them are killed and many others are injured.		しかし、彼らの中には () ひといます そして、他にも () ひとが大勢います。
Landmines do this.		地雷のしわざなのです。
Part 2		パート2
Ken : Landmines are terrible.		地雷は () です。
Are they removed easily?		それらは簡単に () 。
Mukami : No, they aren't.		いいえ、そうではありません。
Specialists are needed.		専門家が () 。
Ken: How do they remove the landmines?	()	彼らは地雷を除去するのですか。
Mukami : They usually do it by hand.		彼らは普通 () 。
This is slow and dangerous work.		これは () 作業です。
Ken : I can imagine that.		その作業を目に浮かべることができます。
Part 3	は省略	

このワークシート作成の手順は以下の通りである。

- (1) 用紙を左右二段組みに設定する。
- (2) 左段に教科書本文の英文を配列する。ワープロソフトのセンタリング機能を用いて中央配列とする。
- (3) 左段の英文は、およそチャンク毎に改行して提示する。空欄は設けない。
- (4) 右段に日本語訳を配列する。左段の英文に対応させる。中央配列とする。
- (5) 右段の日本語訳の中で生徒に訳出を求めたい箇所については空欄とする。

Ⅲ. ワークシートを使用した活動の工夫

上に示したワークシートをただ生徒にやらせるだけでは（たとえば、日本語訳の空欄を埋めさせる等）、教材の内在化はとうてい期待できない。ワークシートを使用した以下のような有意義な活動を工夫してこそ、初めて効果が期待できるのである。

1. 本文の完全な理解を前提とする

様々な活動をさせる前に、生徒が教材内容と本文とを母語により完全な理解をしていることが大前提となる。上のワークシートでは新教材の内容は受動態である。受動態の概念やその使われ方、あるいは能動態との違い（本文中の“Landmines do this.”という箇所はなぜ“This is done by landmines.”となっていないか等）を理解させておかねばならない。ワークシート右段の日本語訳の空欄を埋めさせることも必要である。

2. ペア・ワーク (Pair Work) の活用

生徒二人でペアをつくり、ひとりをA、片方をBと決める。

(英語から日本語へのペア・ワーク)

ワークシートを中央で半分に折り、Aは左段の英語のみを、Bは右段の日本語訳のみを見る。

A : ワークシートを見て、英語を読み上げる。

B : ワークシートを見ないで、Aの音読箇所を日本語に訳する。

例

A : What is this?

B : これは何ですか。

A : It is a danger sign.

B : 危険を示す標識です。

・
・
・

(日本語から英語へのペア・ワーク：上のペア・ワークより断然難しい)

B : ワークシートを見て、日本語を読み上げる。

A : ワークシートを見ないで、Bの日本語を英語に訳する。

例

B : 地雷は恐ろしいです。

A : Landmines are terrible.

B : それらは簡単に除去されますか。

A : Are they removed easily?

・
・

3. 制限時間付きの読み (Timed Reading)

制限時間内にどのくらいの量の英文を音読あるいは黙読できるか、という活動である。筆者の指導経験上では30秒が妥当な制限時間である。同じスタート箇所からを2回読ませ、伸びを実感させることも教育的である。音読の場合、急ぐあまり省略する生徒もいるので、ペア・ワークの形でタイム・キーパー役の生徒に相手の音読をチェックさせると良い。

4. アナウンサー・リーディング (Announcer Reading)

昔のアナウンサーは原稿を読み上げる際には、文章の最後の箇所では視聴者を意識して顔を上げて読んだものである。これに倣い、英文音読時に文の最後の箇所では顔を上げて音読させる。この活動を十分に練習しておく、次に示すリード・アンド・ルックアップに難なく移行できる。

5. リード・アンド・ルックアップ (Read & Look Up)

教師の“Read!”という指示で生徒は英文を黙読する。次の“Up!”という指示で生徒は顔を上げ英文を見ないで、黙読の箇所を一斉に声に出して吐き出すという活動である。大変地味ではあるが、内在化を強力に促進するものと考えられる。

IV. 内在化の理論的考察

「そもそも内在化とは何か」とあらためて問われると、その定義付けはなかなか困難である。元来、内在化は心理学の分野でヴィゴツキー学派が発展させてきた概念であり、内面化・心内化・内化とも言われる。A. N. レオンチェフが1972年に発表し、翌年に翻訳された論文「心理学における活動の問題」の中で、内面化について端的にふれているので引用してみよう。

「…内的な思考諸操作の発生に関する具体的=心理学的見解の発展において主要な役割を果たしたのは、**内面化**という概念を心理学に導入したことである。…ソビエト心理学では内面化(転回)という概念は、普通ヴィゴツキーと彼の後継者達の名前と結びついており、この過程の重要な研究はかれらによって行われている。…ヴィゴツキーは心理科学の基礎に置かれなければならない、重要な、相互に関連するモーメントを2つ抽出した。つまり、人間の活動は道具的(インストルメンタルな)構造を持つということと、人間の活動は他の人々との相互関係システムの中に含まれるということである。これら2つのモーメントは人間の心理学的諸過程の特質をも決定する。道具は、人間を物質界だけでなく、他の人々とも結びつける活動を媒介している。このことのおかげで、人間の活動は**人類の経験を自己の中にとり入れる**。ここから、人間の心理諸過程(人間の高次心理機能)は、社会=歴史的に形成され、周囲の人々との協同、コミュニケーションの過程でこれらの人々から伝授される諸手段、諸様式を、その必須な環として持つような構造を獲得する、ということが起こる。しかし、ある過程の遂行様式、手段を伝授することは外面的な形つまり、行為という形、あるいは外的言語行為という形以外では不可能である。いいかえれば、人間に特有な、高次の心理諸過程は人間と人間との働きかけ合いの中でのみ、すなわち心理間的過程としてのみ生ずることができ、その後はじめて個人によって自主的に遂行され始める。この場合、若干の心理諸過程はさらに自己の最初の外的形態を失い、心理内的過程へと転化する。…内面化の過程は、外的活動が、前からある、内的なく意識の平面に**置き換えられる過程**ではない。これは内的平面が初めて**形成される過程**である。」

(レオンチェフ 1973: 14-16 太ゴシックは原文による。下線は筆者による。)

このように、内在化は人間が人間社会の文化-歴史的発展の所産を自己の中に取り込むことにより、意識が自

然的・動物的な低次の段階から文化・歴史的な高次の段階へと創り変えられることをいう。また、その活動過程は、1) 主体（人間）と客体（外的対象世界）との間に中間的な環が存在するという媒介的過程、2) 人と人とのコミュニケーションの過程という2つの特徴を合わせ持つ。1) についてヴィゴツキーは、媒介項としての中間的な環を「道具」とみなし、技術的な道具よりも人間が文化歴史的に創造した記号（言語や数）という心理的道具に関心を払ったのである。いわゆる記号による媒介（semiotic mediation）とは、心理的道具としての記号が人間の行為の中に組み込まれることによって、人間は自己の行為や思考や精神機能を制御し調整（self-regulation）できるように、記号を自らの支配下におくという意味である。2) は、人間に固有な高次精神機能は個人という言葉で閉ざされた系の中に帰せられるものではなく、人と人とのコミュニケーション活動や社会的な諸活動の中にこそ、その起源が認められるという主張と関係する。記号によって媒介され、内面化された高次精神機能は人間の内側から自然に発生するものでは決してなく、社会的起源を持つものである。

次に、現代において頻繁にヴィゴツキーを援用している希有な進化心理学者、トマセロは内面化について次のように指摘している。

「内面化は、ある人たちが思うほど神秘的なプロセスではなく、単に模倣学習の正常なプロセスにすぎず、他者どうしが互いに注意を共有するのに使ったのと同じ記号的手段の使い方を自分も学ぶという、特別な間主観的な状況で起きるというだけである。そうやって他者から言語記号を模倣しながら学ぶことで、私は彼らの伝達意図（彼らが、私にも注意を共有させようとするその意図）だけではなく、彼らが採用した特定の視点も内面化することになる。」

（トマセロ 2006: 171）

トマセロは、このように内面化の基盤にヒトが固有に持つ模倣能力と同調能力を据えているのである。同調能力とは、「他者を自己と同じく意図を持った主体として認知し、行動の背後にある意図性と因果的構造のスキーマを見出す能力」（トマセロ 2006 の訳者解説 p.293）に他ならない。

V. 英語科教育における内面化について考える視点

筆者はかつて内面化のもつダイナミズムについて考察したことがある（西本 2007）。模倣・記号操作・内部への成長という3つの視点からである。模倣（imitation）とは単なる模写（copy）や反復（repetition）ではなく、対象となるモデルを学習者が自己のうちに内面化する積極的な再構築の実験作業（reconstructive experimentation）であり、記号操作とはウィトゲンシュタインの「思考は本質的には記号を操作する働きだと言えよう。」という言説に導かれるものである（ウィトゲンシュタイン 1975: 30）。内部への成長（ingrowing）とは、ヴィゴツキーの「個人的意味の発達」に他ならない（ヴィゴツキー 2001）。英語科教育との関連では、模倣という視点からではシャドーイングの問題、記号操作という視点からでは外国語処理の自動化という問題、内部への成長という視点からでは学習者自身の内なる意味の発達、すなわち外国語による意識世界に充たされた意味の発達、これらがすぐに俎上にのぼるであろう。しかし、これらの視点だけでは充分ではない。内面化には身体性（embodiment）と情動（emotion）の問題が不可分の関係として存在する。たとえば、ワークシートで示した英文のうち、Are they removed easily?や They usually do it by hand.の内面化には身体性の問題がつきまとうのは明らかである。また、本教材のテーマである地雷の問題については「恐怖」「平和について考える」等の情動的な視点が内面化には不可欠である。これらの問題は教師の生徒への声かけによるところも大きい、今後も内面化を考えるうえで大切な視点であり続けることは論を待たない。

参考・引用文献

- レオンチェフ, A. N. 1973. 心理学における活動の問題 黒田直実・小島広光(訳)「ソビエト心理学研究」第16巻 pp.1-28.
- 西本有逸 2007. 「心内化」再考 「ヴィゴツキー学」第8巻 pp.25-31. 神戸:ヴィゴツキー学協会
- トマセロ, M. 2006. 『心とことばの起源を探る:文化と認知』 大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本多啓(訳) 東京:勁草書房
- ヴィゴツキー, L. S. 2001. 『新訳版 思考と言語』 柴田義松(訳) 東京:新読書社
- ヴィゴツキー, L. S. 2005. 『文化的・歴史的・精神発達の理論』 柴田義松(監訳) 東京:学文社
- ウィトゲンシュタイン, L. 1975. 青色本・茶色本 『ウィトゲンシュタイン全集6』 大森荘蔵・杖下隆英(訳) 東京:大修館書店